1200年続く「不滅の法灯」と弥勒菩薩の降臨

一、最澄が灯した法灯

西暦788年（延暦7年）、日本天台宗の開祖である最澄（766年 – 822年）が比叡山に草庵（一乗止観院）を構え、一刀三礼（いっとうさんらい）をもって本尊の薬師如来像を刻み、法灯を捧げました。この灯火は、それ以来一度も途切れることなく、1200年余りの時を超えて現代に伝わっている「不滅の法灯」です。

比叡山は天台宗の総本山となりました。そして、最澄が最初に建立した草庵は、「こここそが比叡山のシンボルであり根本である」という至高の敬意を込められ、後に「根本中堂（こんぽんちゅうどう）」と呼ばれるようになりました。

二、最澄の深い祈り

この法灯を灯した際、最澄は「明らけく 後の仏の御世までも 光伝えよ 法の灯しび」と詠ったとされています。これを現代語に訳すと、「（この比叡山の灯火よ）清らかに明るく輝いて、未来に現れる次の仏（弥勒菩薩）の御世にいたるまで、仏法の光を絶やすことなく伝え続けておくれ」という意味になります。

仏教では、お釈迦様の入滅後、遥か遠い未来に弥勒菩薩が現れ、すべての人々を救うと信じられています。最澄は、自分が亡きあとの未来の人々も仏の教えによって救われるように、そして未来仏である弥勒菩薩へ無事に光を引き継げるようにという深遠な祈りを、この灯火に込めたのです。

三、守り続けられた「不滅の法灯」

最澄が灯した灯火は、その後、比叡山の弟子たちによって1200年もの間、一度も途切れることなく守り続けられてきました。

灯火の仕込みは、菜種油を満たした器に灯芯を浸して火を点すという、極めてシンプルで原始的な構造です。僧侶たちは毎日朝夕の2回、燃料の菜種油を絶やさないように注ぎ足し、文字通り「油を断たぬ」よう細心の注意を払って守り続けてきました。これが、私たちが日常的に使う「油断大敵」という言葉の語源になったと言われています。

1571年（元亀2年）の織田信長による比叡山焼き討ちの際には、根本中堂とともに法灯も一度は焼失してしまいました。しかし、それ以前に山形の立石寺などへ分灯されていた火があったため、そこから再び火を迎え入れることで、灯火が完全に途絶えるのを免れたのです。


韓国全羅南道の順天市須弥山禅院の佛像に咲いた優曇華（写真・徐良玉/大紀元）

四、未来に現れる弥勒菩薩とは

1200年もの間、灯され続けてきた「不滅の法灯」は、日本のみならず世界史的にも類を見ない連続性を誇る奇跡です。その背景には、代々の僧侶たちの並々ならぬ努力とともに、「いつか弥勒菩薩がこの世に現れ、すべての人々を救う」という約束への深い信仰心があったからにほかなりません。

『弥勒下生経（みろくげしょうきょう）』などの仏教経典によると、弥勒菩薩はお釈迦様の入滅後、この世に現れて人々を救うと約束されている「未来の仏」です。この弥勒が降臨して世界を救うという予言は、仏教の各宗派に共通して記述されています。そのため、中国や朝鮮半島、そして日本でも、この教えを深く信仰し、その到来を待ち望んでいる人々が数多くいました。

お釈迦様が亡くなり、次の仏が現れるまでの「仏のいない暗闇の時代」を、この灯火で照らし続けよう――。最澄が灯した「不滅の法灯」には、「弥勒菩薩が登場するその日まで、仏法の光を絶対に絶やさない」という、最澄の並々ならぬ願いと誓いが宿っているのです。

五、西洋の救世主メシアとの「歴史的な繋がり」

西洋の信仰においても、世界の終末（最後の時）が訪れると、救世主である「メシア」が地上に降臨すると説かれています。メシアとは、ヘブライ語で「（聖）油を注がれた者、将来現れて世界を救う救世主」という意味です。唯一神によって遣わされ、終末に「最後の審判」を行い、神の国を樹立して信じる人々を救うとされています。

東洋の仏教と西洋の宗教は異なる信仰でありながら、なぜこれほど救世主のストーリーが似ているのでしょうか。実はそこには、古代の文化交流による歴史的・言語学的な共通のルーツがあるのではないかと指摘されています。

例えば、弥勒菩薩の原名であるサンスクリット語の「マイトレーヤ（Maitreya）」と、メシアの英語読みである「メサイア（Messiah）」は、発音の響きが非常に似ています。そして、「暗黒の時代（末法や終末）のあとに、救世主が地上に降りてきて世界を救う」という世界観は、文化や国境を超えた人類共通の願いそのものと言えるでしょう。

もしかすると、メシアも弥勒菩薩も根源は同じ存在であり、私たちが今も待ち望んでいる「世界を救う救世主」の姿なのかもしれません。

六、幻の「優曇華の花が咲く頃

弥勒菩薩がいつ地上に降りるかについては明確にされていないものの、仏教においては、3000年に一度だけ咲く幻の花「優曇華（うどんげ）」が咲く頃、未来仏である弥勒菩薩、あるいは理想の聖王である「転輪聖王（てんりんじょうおう）」がこの世に現れる前兆とされています。

優曇華は、サンスクリット語の「ウドゥンバラ（Udumbara）」の音写です。『妙法蓮華経』の妙荘厳王本事品第二十七には、仏に巡り合うことの難しさを説いた「優曇鉢羅華（うどんばらげ）」についての有名な一節が記述されています。

「得見仏難　如優曇鉢羅華」――、つまり「仏にお目にかかることができるのは、3000年に一度しか咲かない優曇華の花を見るのと同じくらい、滅多にない奇跡である」という意味です。

また、唐の時代に編纂された仏教用語の解説書である『慧琳音義（えりんおんぎ）』巻八には次の記述があります。

「優曇花……天花也。世間無此花。若如來下生、金輪王出現世間、以大福德力故、感得此花出現。」

これを現代語に訳すと「優曇華は天上の花であり、人間世界には存在しない。もし如来がこの世に下り、あるいは金輪王が現れれば、その大福徳の力によってこの花が初めて現れる」となります。

さらに、中国の天台宗の開祖である智顗（ちぎ）が、『法華経』の文章（文句）を詳細に解説した講義録である『法華文句（ほっけもんぐ）』巻四（上）にも「優曇花者、此言靈瑞、三千年一現、現則金輪王出。」という言葉が記されています。これは、「優曇花とは、こちらの言葉で霊瑞という。三千年に一度現れ、現れる時はすなわち金輪王が出現する」という意味になります。

因みに、弥勒菩薩は「金輪王」、「転輪聖王」とも呼ばれています。「弥勒菩薩」は神々の世界から降りて来る際に用いられる仏号であり、人間界に現れた際に「転輪聖王」、「金輪王」と呼ばれるため、いわば同じ存在の二つの側面(呼び方)だとされています。

実は、1997年7月、韓国のメディアが、韓国の清渓寺にある金銅製の如来座像の胸元に、この聖なる優曇の花が24輪咲いたことを初めて報じました。そしてその後、世界各地で「優曇の花が咲いた」という報道が相次ぎました。

もしかすると、私たちが待ち望む「転輪聖王」はすでにこの世に降臨し、私たちのすぐ傍で普通に生活しておられるものの、私たちがまだそれに気づいていないだけなのかもしれません。

まとめ

「一隅を照らす、これ則ち国宝なり」――、これは最澄の最も有名な言葉です。「誰もが、自分が今置かれているその場所で精一杯に努力し、周りを明るく照らす人こそが国の宝である」という意味を持っています。

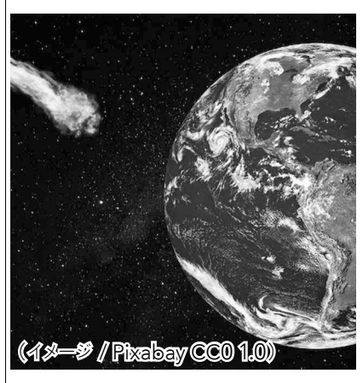
「後の仏（弥勒菩薩）の世まで光を繋ぐ」という不滅の法灯の壮大な祈りは、最澄が比叡山を開いたまさにその瞬間から始まりました。「一隅を照らす」という彼の教えそのものが、あの小さな灯火に象徴されているのです。

遠い未来に、この大地には「優曇華の花」が咲き、弥勒菩薩が降臨して人類を救済してくださることを最澄は切に願っていました。そして、比叡山の「不滅の法灯」は、まさにこの奇跡の瞬間を、1200年以上の時を超えてじっと待ち続けている希望の光なのです。

私たちが待ち望む弥勒菩薩の降臨という大いなる奇跡が、一日も早くこの世界に実現することを願ってやみません。

（文・一心）

娘と「衝突」シミュレーション


（イメージ / Pixabay CC0 1.0）

ある週末、娘と一緒に科学博物館を訪れたとき、宇宙船のシミュレーターで遊びました。

「宇宙船」の中で、モニターの画面を見つめながら操作ボタンを押すと、「宇宙船」が起動しました。座席が強く振動し、モニターには「宇宙船」の進路が示されました。まるで本物の宇宙船を乗っているかのようでした。娘が非常に緊張していましたが、慣れてくると嬉しそうでした。

数分間後、モニター上に複数の隕石が飛んできていることが示されました。私は方向ボタンを操作し、隕石を避けました。しかし、一つの隕石は「宇宙船」と衝突しました。娘は非常に緊張し、「もう止めよう、怖いよ」と怖がりました。

私は笑いながら、「これは本物ではなく、宇宙船シミュレーターだよ」と言いました。しかし、娘はやめたがっていました。「宇宙船」から出てくると、娘は私に対し不満を言い始めました。隕石が「宇宙船」と衝突したシーンは娘に大きなインパクトを与えたみたいでした。私は「これは本物ではない」と説得を試みましたが、娘は隕石と衝突したと一点張りでした。

大人はシミュレーションが現実ではないと知っているため、シミュレーションの体験をあまり真剣に受け止めません。しかし子供は大人と違い、隕石と「宇宙船」が衝突したシーンを見て、座席の振動をも感じると、それが現実だと感じるようです。このことに気づいた私は娘に対し、「今度宇宙船シミュレーターを遊ぶときは宇宙船が隕石と衝突しないよう頑張るから」と言葉をかけると、娘は徐々に気を取り戻してくれました。

家に帰る途中、私は先のシミュレーションの出来事についてよく考えました。日常生活の中では、このような違いは珍しくありません。同じことに対し、人それぞれの受け入れ方、感じ方があるのです。自分が気にかけない些細なことでも、それを非常に重く受け止める人が周りにいるかもしれない。このことを念頭に置きつつ生活すれば、不必要な「衝突」も避けられることでしょう。

（翻訳・黎宜明）

安心！快速！熱情！成功率高！
本人不用去入管 申請手續全代理 愛知 行政書士 玉田事務所
☑ 専門為中部地區中国人申請簽證 ☑ 年中無休 ☑ 初次電話詳談免費 中國語OK!
入管ビザ（簽證）申請専門
会社設立・投資経営
☑留学簽證轉成投資経営簽證
☑人文、技術、技能簽證轉成投資経営簽證
☑国内親屬、友人来日、投資経営
定住、永住、帰化
☑日本人配偶者簽證轉成永住、帰化
☑離婚後日本人配偶者簽證轉成定住
查証業務
☑各種簽證取得・更新・変更
☑国際結婚、家族滞在
☑日本人的配偶者
☑人文、技術、技能、投資経営など
法務業務
☑不法滞在者的在留特別許可
☑申請假釋
☑簽證被拒後，再申請
☑各種理由書作成

9:00~18:00 中国語SB 090－1729－8181
日本語SB 080－4123－8572
日本語 普通電話 0587－81－8100
FAX 0587－81－8102
〒492－8143
愛知県稲沢市駅前2-4-4 スカイル21 101
http://www.visa-aichi.com
入國管理局承認行政書士
玉田和弘